県立長崎図書館だより

いしだたみ

No.198
2025年9月

イラスト　西平あかね

もくじ

◎館長挨拶 ……P 2
◎特集「土地の持つ力とは」 ……P 3
◎映像でたどる被爆八十周年 ……P 4
◎『蔵書点検』ってなんだろう？ ……P 5
◎課題解決支援サービスのご紹介 ……P 6

＜表紙のはなし＞

今号の表紙は長崎県在住の絵本作家・西平あかねさんのイラストです。

『けんだましょうぶ』（福音館書店）で主人公に勝負を挑むタヌキとキツネが描かれています。よく見ると奥には他の絵本に登場する動物たちもいます。

館長挨拶

長崎県立長崎図書館館長　加藤盛彦

昨年度まで図書館を後方から支援する生涯学習課に勤務し、4月から初めての図書館勤務をしております。40 年ほどさかのぼると、大学では教育学部の社会教育ゼミで学びました。ゼミの教官から、「子どもの読書に関する社会教育の動きがおもしろい」というアドバイスを受け、「地域子ども文庫」をテーマにした卒論に取り組みました。長崎県と福岡県の文庫を巡り、熱意をもって子どもの読書活動に取り組まれる方々と出会いました。県内では、純心こども図書館や長崎市内の地域文庫の様子を拝見しました。ボランティアの方々の力作である「モチモチの木」の巨大な挿絵にブラックライトが投射され、子どもたちが本の世界に誘われる光景が、今も頭に浮かびます。図書館に勤務するようになり、当時の読書関係者の熱意や努力について、お会いする方々から改めて教えていただく機会に恵まれました。40 年ぶりの学び直しを堪能しています。

また、当時の人々の読書に対する熱は、40 年たった今も脈々と受け継がれていることを、県内各地の図書館に足を運ぶたびに感じます。工夫を凝らしながら本と人をつないでおられる図書館員の方々、図書館に重なり豊かな人生を歩んでおられるボランティアの方々のお姿に頭がさがります。その一方で、急速な社会のデジタル化、人々の価値観の多様化、書店数の大幅な減少など、本を取り巻く環境は劇的に変化しています。これからの学校教育を描く中教審の資料には、多様な子どもの状況の一つとして「家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子ども」という記載もあります。

このような状況であるからこそ、県内の図書館がつながり、本の魅力を広く発信し続けることの重要性を感じています。諏訪の森で本県の歴史的な財産を守り続ける「郷土資料センター」と、県央の地で未来への扉をひらく「ミライｏｎ図書館」、あわせて 80 名あまりの職員がいます。先達が築かれた伝統を大切に受け継ぎ、これからの図書館の可能性を拓こうと誇りをもって真摯に取り組む職員です。この職員一人一人が存分に力を発揮できる環境づくりを進めることが、私の最大の使命です。

本冊子が発行される頃、さだまさしさんをスペシャルアンバサダーとした国民文化祭「長崎ピース文化祭」が開幕しています。二刀流どころか、歌手、作家、司会などあらゆる分野で活躍されるさださんが、「がんばらんば国体」の折、明るくたのしく、ふるさとの言葉で私たちに語りかけてくださいました。

♪ がんばらんば 何でんかんでん がんばらんば がんばらんば 愛ちゃん恋ちゃん がんばらんば
♪ がんばらんば どいでんこいでん がんばらんば がんばらんば 我ちゃ俺ちゃ がんばらんばね ♪♪

たのしさが人をつなぎ、新たな発想を生みます。本と言葉をまんなかに据え、ワクワクするような図書館の魅力を広げるために、何でんかんでんがんばってみたい。今の私の思いです。

皆様におかれましては、ぜひ図書館に足をお運びいただき、たくさんのご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げましてあいさつといたします。どうぞよろしくお願いします。

特集　「土地の持つ力」とは
～「描いてみんね！長崎」から生まれた小説『妻はりんごを食べない』～

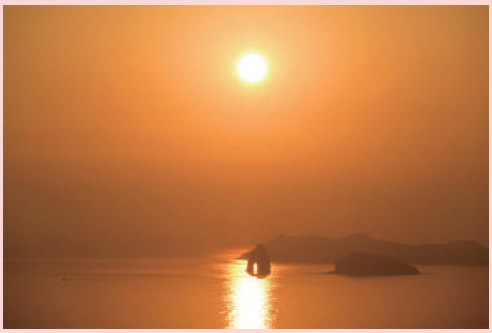
「描いてみんね！長崎」事業とは作家や漫画家を編集者とともに長崎県にお招きし、県内の各所を訪れて取材してもらい作品に仕立ててもらうという、長崎県独自の企画です。この事業を通じて生まれたいちばん新しい小説が本年の6月に世に出ました。それが瀧羽麻子氏の「妻はりんごを食べない（幻冬社刊）」です。先日、この小説の発刊を記念して、著者の瀧羽氏をミライｏｎ図書館にお招きし、自作について語っていただく機会を得ました。そのなかで瀧羽氏は長崎を取材したことで「作品世界が土地の力に支えられて力づけられた」と現地取材の意義を語られました。また当初は別の土地を考えていたラストシーンが、取材に訪れたことで長崎に変更になったという秘話も明かされ会場を驚かせました。トークイベントのあとはサイン会が開催され、瀧羽氏はファンの一人ひとりと会話を楽しみながらサインに応じておられました。驚きの展開が最後に待っているこの小説、未読の方はぜひ読んでみてください。

瀧羽麻子氏と担当編集者の袖山満一子氏からコメントをいただきました

このたびは、暑い中ご来場下さった皆様に、心よりお礼申し上げます。仕事柄、ひとりで書くことには慣れていますが、人前で喋るというのは専門外で（しかもフィクションではなく実話を）、終始とりとめのない話になってしまったにもかかわらず、あたたかくご清聴いただきありがとうございました。

小説を書くとき、ストーリー展開や人物設定に並び、どこを舞台とするかはとても重要です。現地に出かけて、そこの空気を吸い、景色を眺め、すれ違った人々の会話に耳をすますのは、わたしにとって執筆前の大事な時間となっています。特に今作では、長崎という土地が物語に特別な力を与えてくれたと実感しています。今回のイベントで、その感謝の気持ちを地元の方々にもじかにお伝えできたことが、なによりうれしかったです。すっかり長崎の魅力にぞっこんで、今後また他の作品でも登場してもらうことになりそうですが、見守っていただけると幸いです。

瀧羽麻子



「描いてみんね！長崎」というプロジェクトのことを知ったのは、『妻はりんごを食べない』の連載が、すでに途中まで進んでいた時でした。実は、瀧羽麻子さんとの打ち合わせでは、別の土地で物語が終わる予定になっていたのです。瀧羽さんは、舞台やモデルとなる土地まで実際に足を運び、取材することで、文章に命を注ぎ、物語を生き生きと動かす方。長年そのお仕事ぶりを見てきたので、たまたま耳に入ったこの企画に何か運命のようなものを感じ、瀧羽さんに話したところ、「ぜひ行ってみたい」と。そこからは「奇跡」ともいえる展開に！思いもしなかった「こと／もの」に次々出合い、物語が長崎に引っ張られ、操られているような感覚さえありました。これも、長崎県文化振興・世界遺産課の方、五島市の職員の方、そして県立長崎図書館の先生――みなさんが、こちらの希望にあわせて、廻る土地を選び、丁寧にご案内くださったからこそ。言葉に尽くせぬ感謝があります。「観光」では決してできない経験は、得難い物でした。

袖山満一子（幻冬舎）

令和 7 年は長崎・広島に原爆が投下されて 80 年という節目の年にあたります。郷土資料センターでは長崎市の写真家小川虎彦氏の撮影した被爆直後の長崎の写真を中心に展示をおこない、被爆の実相をあらためて映像でたどりました。また関連企画としてドキュメンタリー映画『ヒロシマ　ナガサキ　最後の二重被爆者』の上映会をプロデューサー・監督の稲塚秀孝氏の協力を得て実施し、写真と映画の双方から被爆の実相を考える機会としました。

1．小川虎彦氏とは

原爆投下直後の長崎を撮影したカメラマンとしては、被爆の翌日に長崎入りし、惨状を撮影した山端庸介氏、朝日新聞記者だった松本榮一氏などが有名ですが、長崎県立長崎図書館には被爆直後長崎県庁からの依頼により撮影した長崎市在住のカメラマン小川虎彦氏〔1890−1960〕の写真アルバムが所蔵されています。今回被爆８０周年にあたって郷土資料センターでは所蔵しているアルバムに収められている１００枚を超える写真のなかから、これらを拡大、さらに一部はパノラマ加工を施して展示しました。小川氏の写真の特徴は地元（長崎市桜町）で写真館（小川写真館）を営まれていたこともあって、街の隅々まで熟知したアングルで撮影が可能だったことです。これによって、先にあげた山端氏らとは異なる視点で原爆の惨状を後世に残すことになりました。戦後も、小川氏は区画整理（道幅拡張）のために閉店するまで、街の写真館を続けられたそうです。

忠霊塔（立山２丁目）から見た被爆後の長崎市街地（撮影：小川虎彦氏）

2．ドキュメンタリー映画『ヒロシマ　ナガサキ　最後の二重被爆者』について

今回の展示関連企画として映画『ヒロシマ　ナガサキ　最後の二重被爆者』の上映会を監督の稲塚秀孝氏のご協力を得て開催しました。「二重被爆者」とは広島市と長崎市の両地において被爆した方のことを言います。基本的に被爆者は広島か長崎のどちらかで被爆したと区分されますので、その実数は不明ですが、稲塚氏らの調査によると１００人を軽く超えるのではないかということです。稲塚氏は取材の過程で二重被爆者の山口彊氏を知り、その晩年に密着し取材をおこないました。このドキュメンタリー映画は、本人へのインタビューと関係者の証言を通じて山口氏の激動の人生をたどり、原爆の悲惨さと平和の尊さを描いています。山口氏が他界された今、その映像に刻まれた証言はさらに重要性を増していくことでしょう。

『蔵書点検』ってなんだろう

毎年６月ごろ、ミライｏｎ図書館と郷土資料センターは（管理運営）規則に基づき２週間ほど休館しています。「特別整理のための休館」として返却日の変更など利用者の皆様にはご迷惑をおかけしていますがこの期間に図書館の中で何が行われているか知っていますか？「職員は長期休暇でだれもいない？」いいえ、休館中に図書館では『蔵書点検』が行われています。『蔵書点検』とは、図書館で所蔵している本が正しい場所にちゃんとあるか確認する本の『棚卸』のような作業です。少し前までは１冊ずつ確認していましたが今は専用の機械を使い『ICタグ』を読み取って確認しています。それでは、『蔵書点検』の様子を紹介します。

毎朝いつも通りに出勤し、３階のカウンター前に集合、前日までの進捗状況やその日の予定を聞き、当日の担当作業や場所を確認したら各自移動して作業開始です。
※午後からも集まり午後の作業を確認します。

まずは、機械を使う前に本棚の本が正しく並んでいるかチェックし、間違った場所にあれば、正しい場所に戻します。実は、この作業がとても大切です。

皆さんも本の正しい場所がわからなくなったら、気軽にカウンターまでお持ちいただければ、職員が正しい場所へ戻します。

機械を使い、『ICタグ』を読み取ります。本棚に並ぶ本の背表紙に機械をかざすと機械が反応します。まれに読み取れない本もありますが、最後は人の目で探します。「こんなところにあった！」と、毎年隅々まで探しています。スマートフォンで操作する機械は、何万冊もの本を読み取るため毎日充電します。

長期の休館を利用して、『蔵書点検』だけではなく、閉架書庫の配置換えも行いました。重い本や新聞・雑誌を移動するのは重労働で、毎日クタクタになりながらの作業になりました。図書館の本は増える一方なので工夫しながら配置を考えています。

利用者が必要な本を必要な時にすぐに提供できるように、本がどこにあるか把握するための大切な作業『蔵書点検』。来年も６月ごろ実施予定です。「今年も、図書館職員さんたちは頑張っているのかな」と思い出していただけると嬉しいです。

課題解決支援サービスのご紹介

県立長崎図書館では、県民のみなさまの、生活の中で知りたいことや困ったことなどにお答えするための資料・情報を提供し、くらしのお手伝いを行っています。今回は各サービスの概要をご紹介します！！

ビジネス・産業情報サービス

【ビジネス】

長崎県よろず支援拠点による無料経営相談会（毎月第一金曜日）や長崎県人材活躍支援センターによる就職支援・個別相談会（毎週水曜、ただし休館日を除く）などを開催しています。

ビジネスコーナー

【産業】

農林技術開発センター等と連携し、長崎県産物に関連した楽しいイベントを開催しています。

産業イベントの様子（森のクラフトづくり）

医療・健康情報サービス

認知症、闘病記に関するブックリストの提供や長崎県看護協会によるまちの保健室（偶数月第3土曜日）などを開催しています。

他にも様々な機関と連携し、医療・健康に関するイベントや情報提供を行っています。

がん情報コーナー

まちの保健室

がんフォーラム

闘病記文庫

子育て情報サービス

子育て本や絵本のブックリスト、育児雑誌等の提供やイベントの開催を行っています。

子育て本マップ

子育て・絵本ブックリスト

子育て本コーナー（こどもしつ）

子育て世代向け資産形成に関するセミナー

その他の課題解決支援サービス

【法律情報サービス】

法律に関する図書やオンラインデータベースの提供、法テラス長崎との連携イベントを開催しています。

【アプリ、電子書籍サービスの提供】

ミライon図書館アプリ

電子書籍サービス

法テラスリーフレット

【多文化サービス】

日本語を学ぶための資料も揃えています。

日本語を学ぶコーナー

詳しくは、ミライｏｎ図書館ＨＰ「暮らしの課題解決お手伝い」のページをご覧ください

ミライｏｎ図書館ＨＰ　「https://miraionlibrary.jp/living/」

スキャン！

編集・発行　長崎県立長崎図書館　長崎県大村市東本町４８１番地　長崎県長崎市立山１丁目１番地５１号　ISSN 1344-5235